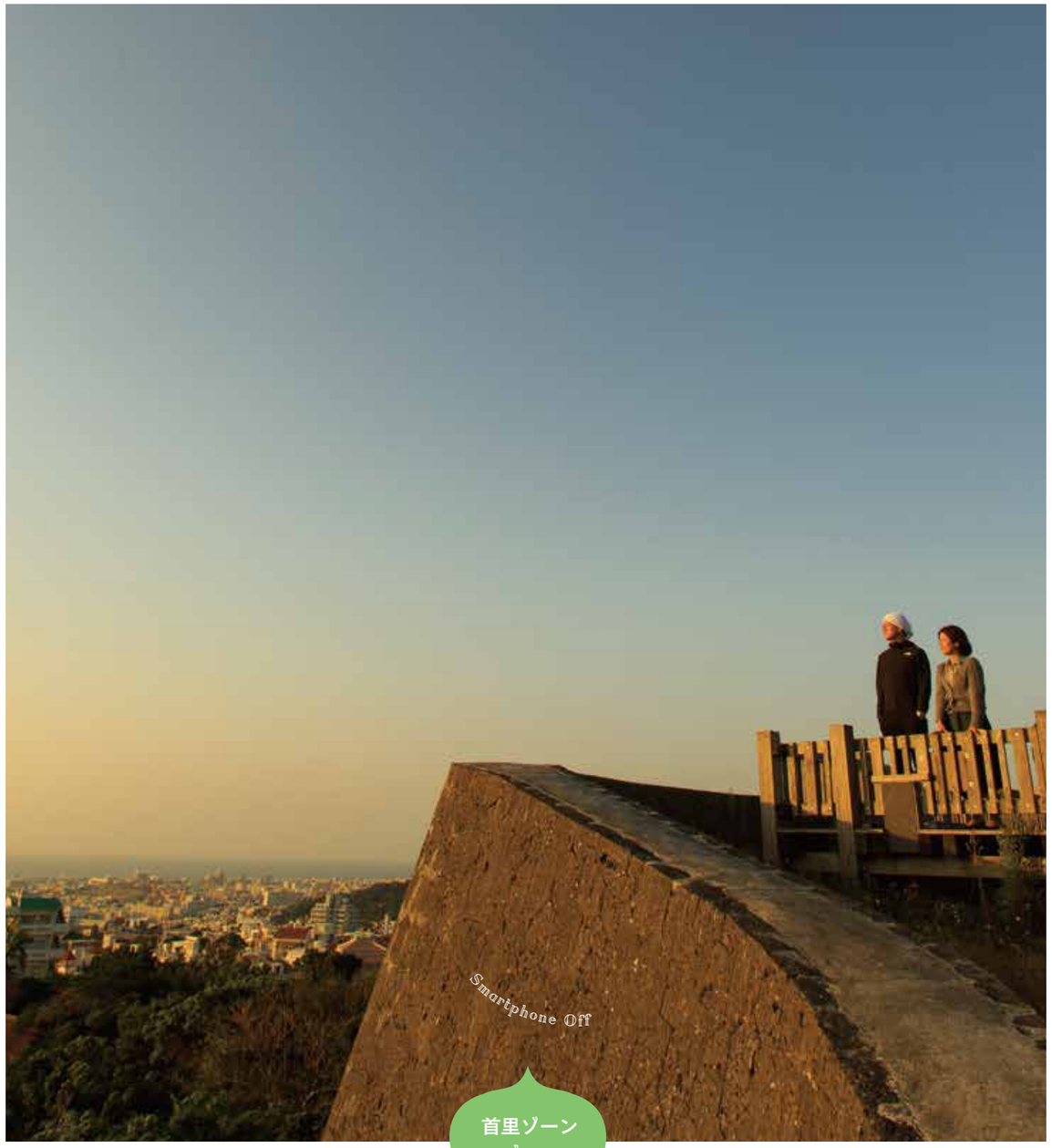

首里ゾーン
story

スマホ／オフ

世界遺産を目当てに首里城公園を訪れる中高年や歴史ヲタクだけではなく、インスタグラムを常用している若者にもエリアの魅力を知ってもらえるよう、若者を主人公にスマホを絡めてストーリーを展開。

◆登場人物

比嘉　龍太／沖縄県在住　25歳　壺屋焼陶工
津島　舞　／東京都在住　25歳　会社員

那覇空港

「でもさ、2人でいても舞はずっとスマホ見てるさ。あれは好きじゃない」
那覇空港で人気のポークたまごおにぎりの行列に並びながら、舞の頭の中では龍太の言葉が何度も再生されていた…。
東京在住の津島舞は高校の修学旅行で沖縄にハマり、社会人になってからは年に何度もこの島を訪れている。去年の沖縄旅行で知り合った比嘉龍太は、壺屋焼の陶工として働くうちなーんちゅ。沖縄滞在中に付き合いが始まり、そのため舞はこの1年で6回という過去最高ペースで沖縄に来ている。
今日は2人が付き合い始めてちょうど1年の記念日。この日に合わせて舞は沖縄旅行の日程を組み、毎日龍太にLINEで旅の計画を送っていた。しかし、龍太はスマホを持ってはいるものの、ほとんど触れず、たとえ家に忘れても一切気にしない。そんな性格なので返信はほぼ、ない。
防水ケースに入れて風呂でもスマホを離さない舞にとって、その感覚はとても同い年とは思えなかった。そのせいで昨晩もケンカをした。
LINEの画面には舞からのメッセージだけが溜まっていき、既読さえ付かない。
そんな状態に苛立ちがピークを迎えた舞は、深夜になって電話を掛けた。
「はーい。なに!?」

ポークたまごおにぎり

いつも通り気の抜けた龍太の声。
「ねぇ、どうしてLINE見ないの?明日からの予定、送ってるし」
「あぁ、うん。あとで見るよ」
「…アタシ、明日早いからもう寝ちゃうよ?」
「そっかー、おやすみ」
その態度に舞の不満は爆発し、龍太を責める言葉がとめどなく溢れ出した。
1600㎞離れた遠距離恋愛でも、スマホがあればいつでも繋がっていられると思っていたのに…。口撃を緩めない舞が短い息継ぎをした瞬間、狙っていたかのように龍太が口を開いた。
「でもさ、」
――やっと行列の最前列にたどり着き、『ポーたま』を注文する舞。財布を取り出す舞の頭の中でまたあの言葉がリピートされる。
「でもさ、2人でいても舞はずっとスマホ見てるさ。あれは好きじゃない」
その後続けて龍太はこう言ったのだった。
「ねぇ、たまにはスマホを一切見ずに、沖縄を観てみない?」

ゆいレール

那覇空港駅のホームで舞はスマホの電源を切った。
昨夜、龍太が提案したのはスマホを一切使わずに沖縄で待ち合わせをするというゲーム。電話を切ったあと、珍しく届いた龍太からのLINEには、「待ち合わせの場所は【いりのあざな】。スマホで調べちゃダメ。人に直接聞くのはアリ。んじゃ、ずっと待ってるね」というルールが書いてあった。
「大丈夫、なんとかなる!」
気合を入れたつもりだったが、真っ暗になったスマホの画面には不安を隠せない自分の顔が映っている。
「いりのあざな、いりのあざな…」
唯一のキーワードを忘れないように繰り返しているところへゆいレールが到着し、舞は慌てて乗り込んだ。
走り出した電車の車窓から見える空は、海との境目が分からないほどに青い。
「インスタに載せたいな」
と思ったが、当然スマホは使えない。以前、舞は龍太に無理矢理インスタグラムのアカウントを登録させたことがあった。
「龍太の作った壺屋焼、インスタにアップしてよ!」
そう言ったのだが、もちろん未だに1枚の写真もあがった事はない…。

ゆいレール那覇空港駅

儀保駅周辺

那覇空港駅を出発しておよそ25分。舞は終着1つ手前の儀保駅で電車を降りた。
【いりのあざな】へのヒントは首里にあるは

宝口樋川

ず、という直感のみでの行動だ。
龍太は那覇市内の泊というところにある古いアパートに住んでいるが、首里の町が大好きでこの町がいかに奥深く歴史ある場所かをよく舞に話していた。
本来、首里を探索するならひとつ先の首里駅で降りる方がいいのかもしれないが、スマホの地図が使えない舞にとっては降りたことのない駅よりも、龍太と何度か訪れたことのあるこの駅からスタートする方が安心な気がした。駅を出て、たまたま通りかかった年配の女性に思い切って声を掛けた。
「あのー、【いりのあざな】ってどこですか？すごく綺麗な場所らしいんですけど」
「あい！なんだっけ？聞いた事あるけど。だー、出てこないさー綺麗なところなら、この近くにある宝口のヒージャーもいいさね。あい、ヒージャーって言ってもヤギの事じゃないからね。あはははー！水が出ているところよ」
沖縄のおばちゃんは元気で豪快だ。
その女性が教えてくれた方向へ進んでいくと、宝口樋川（たからぐちひーじゃー）と彫られた石柱が建っていた。
案内の通りに脇道に入ると緩やかに下る石段があり、そこを下りていくと開けた場所に立派な石碑があり、その隣は石で囲われた洗い場のようになっていた。石垣からは確かに水が溢れ出している。
「ほんと綺麗なとこ。大きな通りからちょっと入っただけでこんな場所があるんだ…」
しばらく水の流れる音に耳を傾けていたが、ここに龍太はいない。
この町にはこんな普通の営みに紛れた美しい空間がたくさんあるのかもしれない…舞はそんなことを思いながら、宝口樋川を後にした。
交通量の多い大通りに戻ると、時刻は午後1時を過ぎていた。
「これからどうしよう…やっぱり首里城の近くかなぁ」
なんとなく、待ち合わせ場所の【いりのあざな】も首里城の近くにあるような気がして、舞は儀保駅から見上げるように小高い丘の上に建つ首里城を目指して歩き始めた。

玉那覇味噌醤油工場（たまなはみそしょうゆこうじょう）

首里城の見える方へ細い坂道を上っていくと、右手に古い石垣が見えてきた。
緑で覆い尽くされた石垣の上には亜熱帯らしいシダ系の観葉植物のような木々が茂っている。かなり大きな屋敷のようで、低くて大きな瓦屋根の下にどっしりと構えた家屋の入り口には、玉那覇味噌醤油工場の看板が掲げられている。舞は雰囲気のある佇まいに思わず写真を撮りたくなったが、
「スマホは絶対に使わない！」
と、坂道をさらに上っていった。
誰にも見られてはいないが、約束を破ると後悔しそうで嫌だった。

鳥堀付近（とりほり）

住宅街の細い道から開けた場所へ出ると、そこは首里城の真下、龍潭池（りゅうたんいけ）の前だった。
「あ、お腹空いてきた…」
ポークたまごおにぎりは食べたが、お昼はとっくに過ぎてもう14時前だ。舞はついでにお昼ごはんの情報も得ようと、通りかかった若いカップルに声を掛けた。
「すみません、この近くで【いりのあざな】っていう場所知りませんか？」
「ちょっと聞いた事ないですねぇ。ごめんなさい、私たちも今年から大学で来てるんで…」
話を聞くと、すぐ近くにある沖縄県立芸術大学の学生らしい。
「そうかぁ。あ、じゃあお昼食べられるとこ知りませんか？美味しいとこ！」
舞が質問を変えると、女性の方が答えた。
「『ゆしどうふそば』とかどうですか？この先を行ったところにあるななほし☆食堂、オススメですよ」
教えられた方向へ10分ほど歩くと、ななほし☆食堂が見えてきた。
割と新しい建物で清潔感がある。店内へ入ると、お昼時は過ぎているのにも関わらず、多くの客でテーブルが埋まっていた。席に着いてメニューを見ると、最初に『ゆしどうふ』のカテゴリーが目に入る。舞は迷わずゆしどうふそばを頼んだ。
しばらくして運ばれて来たゆしどうふそばは絶品だった。クセがなく、あっさりしているのにダシが効いていて香りもいい。なによりも豆腐がフワフワで喉をするりと通り抜けていく。
「あー美味しい！」
一気にゆしどうふそばを食べきった舞は、思わず声に出してそう言ってしまった。
「こんなに美味しいそば、龍太と食べたかったな…」
この食堂を教えてくれた学生カップルの仲睦まじい姿を思い出しながら呟く。
「はぁ…【いりのあざな】ってどこなんだろう。古い方言なのかな、今は違う呼び方だったり。もしかして、神聖な場所で普通の人は立ち寄らないとか!!」
考えを巡らせながらレジでお金を払い、ついでに店員に聞いてみた。
「この近くに歴史的な場所とか神聖な場所ってありませんか？」
「首里は歴史的な場所だらけですからね～。うーん、神聖な場所かどうかはわからないけど、この先に行くと昔からのシーサーはありますよ」
「昔からのシーサー!?そこかもしれない！」

龍潭

崎山付近（さきやま）

「そうだ！シーサーだよ！なんでもっと早く思いつかなかったんだろう」
食堂を出てからの舞の足取りは、明らかに力強くなっていた。
「龍太は壺屋焼の職人なんだから。沖縄の焼き物と言えばシーサーでしょう」
龍太が働く壺屋やちむん通りにも『うふシーサー』という巨大なシーサーがシンボルとして設置されている。舞と龍太は何度もその前で写真を撮った事があった。
「【いりのあざな】はシーサーの名前なんだ！昔からの古いシーサーの前で待ち合わせだなんて、私たちにピッタリじゃん！」
正解に近づいた気がして早足で進む舞だったが、小さな十字路を通り過ぎたところでふと立ち止まって振り返った。視界に入った店がどうしても気になったのだ。
その店は十字路の角にあり、アルミサッシのガラスドアから中の様子が丸見えだった。ガラスには赤文字でカタチキと書かれている。中では女性がなにやら作業をしていた。
「あ、紅型（びんがた）だ…」
舞は沖縄の工芸の中でも紅型が特に好きだ。
龍太の影響もあってもちろんやちむんも好きなのだが、紅型の鮮やかさと独特な絵柄はいつも舞の心を惹きつける。カタチキは工房と店舗が一緒になっているようで、中に入ると作業場の反対側に様々な紅型製品が並べられている。ストールやトートバッグ、コースターから、蝶ネクタイまで、どれも可愛らしさの中に上品さが滲み出ている。赤瓦の屋根とハイビスカスが染められた味のある絵柄のブックカバーも素敵だ。
「うちは染めから縫製まで全部手作業でやってるんですよ」
さっきまで作業をしていた女性が話しかけてきた。
「どれも素敵ですね。このブックカバー、本好きの母へのお土産にいいなと思って」
と返したものの、今は龍太との待ち合わせ場所へたどり着くのが先だ。
「あの～、後でまた寄ってもいいですか？今、待ち合わせのシーサーまで行かなくちゃいけなくて」
「もちろんです。シーサーって、すぐこの先にある古いシーサー？」
「たぶんそれです！やっぱりあるんですね！ありがとうございます！また後で、必ず来ます！」
そう言うと、舞は店を飛び出した。
細い道を早足で進んでいくと、公園のような場所に着いた。
「あー！あれだ！着いた――――！」
公園の中に入っていくと石で出来たシーサーが目についた。しかし、龍太は居ない。

有限会社 玉那覇味噌醤油

御茶屋御殿石造獅子

カタチキ 紅型×ミシン

「うちゃや、うどうん、いしじし…」
御茶屋御殿石造獅子と書かれた説明文には丁寧に読み仮名まで振られていた。
「うそ、【いりのあざな】じゃないの？えぇ～!!」
これまで歩き続けてきた疲れが一気に身体を襲ってきた。石のシーサーの前で座り込んでしまった舞はしばらく呆然としていた。
我に返った舞が説明文を読むと、この石獅子は昔の写真を元に復元された物で、元々あったものは沖縄戦で破壊されたと書かれている。
隣には雨乞御嶽と言われる拝所もあり、琉球王国時代に文字通り雨乞いの祈願をしていたらしい。この拝所も周りの石積みなどが割と新しく見える。
「これも復元なのかな？戦争では首里城も激戦地だったって、龍太が言ってたな…」
舞はしばらく見晴らしの良いこの場所から、眼下に広がるたくさんの家々を眺めていた。

首里金城町

時計を見ると16時半近くになっていた。足も身体も、さっきの石獅子が乗っているかのように重い。トボトボと歩いていた舞の鼻先を独特な甘い香りがかすめていった。
「ん？この匂い…」
見ると目の前に瑞泉酒造の看板が出ている。泡盛を醸造している酒造所だ。
タイ米を蒸す甘い香りを感じながら、舞は龍太との会話を思い出していた。
「舞のお父さんにオレの作った抱瓶に泡盛入れてプレゼントしたら喜ぶかなぁ」
「龍太のやちむんに入れたらどんなお酒も美味しくなるよ。お父さんきっと酔っ払っちゃうなぁ」
笑顔でそう言った舞に龍太は照れた表情を見せていた。そんな事を思い返していたら龍太との思い出がどんどん溢れてくる。いつも龍太は舞に沖縄の話をしてくれていた。大好きな沖縄の、大好きな首里にどんな場所があって、どんな歴史があって、どんな人たちが住んでいるか。いつも真っ黒な顔にくっきりと笑いジワを浮かべながら話してくれた。
それを舞は一生懸命聞いていた…はずだったのに、ぼんやりとしか思い出せない。
「あんなにたくさん話してくれたのに、私は何を聞いていたんだろう」
次の行き先を調べて、翌日のスケジュールを確認して、天気予報をチェックして…。撮った写真を整理して、友達からのLINEに返事を…いつもスマホを握ったまま…。
「龍太に、会いたいな」
どれくらい歩いていたのだろうか。
舞がふと顔を上げると、見たことのある風景があった。
「あ、この道来たことある。この先にえーと、確か石畳があったような…」
朧げな記憶を頼りに進んで行くと、首里金城町石畳道に突き当たった。
すると先の方に数人が固まって居るのが目に入った。近づいてみるとどうやらこの辺りを歴史散策している人々のようだった。
ひと際大きな声で喋っているのはガイドだろうか。
「ここは、しゅりかなぐしくむらやーと言いまして、えー、まぁ休憩所なんですけどね…」
陽気な男性ガイドの声につられて、舞もいつのまにか輪の中に入って話を聞いていた。
すると、ガイドが舞に気付き、
「あい、お姉ちゃん大丈夫ね？いろおーじゃーして。沖縄はまだまだ暑いんだのに、無理しないよ～。うり、これ食べなさい？」
手渡されたのは黒糖だった。
「あ、ありがとうございます…」
舞は言われるがままに口に入れた。優しい甘さが口の中に広がり、少し元気になった気がした。
「あ！あの…」
その場を離れようとするガイドを舞は呼び止めた。
「なんね？」
「あの、その、【いりのあざな】…」
「あ～！黒糖代はいらないよ！サービスサービス。そのかわり今度沖縄来るときは僕の歴史ツアーに参加しなさいね～」
そう言って歴史散策ツアーの人々は足早にその場を去って行った。
「もう！あの人なら知ってると思ったのに！」
再び1人になった舞は石畳の上に座り込んでしまった。

真珠道

瑞泉酒造

首里金城村屋

結局、【いりのあざな】は分からず、足はパンパンでもう歩けない。
空はオレンジ色に変わり、もうすぐ日が沈む事を教えてくれている。
頬を熱い何かがつたい落ちる。舞は自分でも気づかないうちに泣いていた。その事にびっくりしていたら、涙が止まらなくなった。
こんなに辛い沖縄は、こんなに寂しい沖縄は、初めてだ。
「なんで龍太はこんなことさせたんだろう。もう、私のこと好きじゃないのかな…。もうルールなんてどうでもいい」
舞は涙を拭うことをやめて、バッグからスマホを取り出し電源を入れた。
すると、ホーム画面にインスタグラムの通知が届いている。開いてみると、舞が無理やり作らせた龍太のアカウントに写真がアップされていた。
たった1枚の写真。それはオレンジ色に染まった景色だった。手前に茂る緑色のはずの木々も、見下ろしている街のビルも、遠くに映る海さえも、全てがオレンジの世界。
「これ…！この場所、知ってる！」
舞は立ち上がり、石畳を駆け登る。まだ涙の乾かない頬をキラキラとオレンジに光らせながら、真っ直ぐと首里城に向かって走り始めた。

西のアザナ

園比屋武御嶽石門の前を通り抜けて首里城正殿の前まで行き、そこから逆方向へ進む。石垣沿いに奥へ向かいその先の緑を抜けると、那覇の街が一望できる。
そして、そこに龍太が待っていた。
「ちょうどいい時間に間に合ったね～」
相変わらずの真っ黒な顔が逆光でさらに黒く見える。
「何が？何が、いい時間って…」
舞は言いたいことがたくさんあるが、息が切れてうまく話せない。
「今、いっちばん綺麗な時間。西(いり)のアザナ、よく分かったな」
「ここ、ここは、龍太が告白してくれたところだから」
「…あ、覚えてた？」
「当然でしょ！」
「よかった。ちゃんと来てくれて」
「あの、でも…ごめん！私、結局スマホ見ちゃった。そしたら、ここの写真が…」
「オレも…ここでずーっと待っててからさぁ、ずーっと舞のこと考えながら。して、夕焼けになってさ、でーじ綺麗で、この景色を舞に見せたいと思って、我慢できなくて、やっちゃった…初めてのインスタ」
夕焼けは雲と混ざり合い、オレンジからピンクへとグラデーションを作り出していた。
やっと息が整って来た舞は、龍太の隣に並んだ。
「龍太、ごめんね。私、龍太のことも沖縄のことも、見ているようでちゃんと見てなかったかも」
夕陽がどんどん水平線に吸い込まれていき、その光に染められた雲同士が重なり合い、まるで2体の龍のように見えた。
海が静かにそれを受け止めている。
もう何百年も昔から、ここにあった風景。しかし、一度として同じものはない。
龍太は思った。約束を果たしたのは、舞ではなく自分であったと。
いつか、ここで果たす約束をもう何百年も待っていたような気分になった。
「オレはさぁ、伝えているようで伝えられてなかったはず。自分の思いさえあれば届くと思ってたけど、それは身勝手だな」
「なんで？」
「オレだけじゃないから」
「ん？」
「舞が居ての、オレだから」
「うん…ん？どういうこと？」
「わからんば！…いいよ、わからんぐらいがいいよ。先は長いし。あ、あと、インスタも悪くないな」
「でしょー！そうでしょー！これからは龍太のやちむん、アップしてね」
「気が向いたらね」
「え～…じゃあLINEは返してね」
「気が向いたらね」
「えー！泣かすんどー」
「おぉ、うちなーんちゅっぽくなってる！」
すっかり日が沈んだ西のアザナで、舞はもう一度スマホの電源を切った。
電話もLINEも繋がらないけれど、代わりにその手は、龍太の日に焼けた手と繋がっている。

（おわり）

ストーリー制作：知念だしんいちろう
監修：賀数 仁然

この物語は史実に基づいた内容を元にしたフイクションです。
※写真注釈
「国営沖縄記念公園（首里城公園）：西のアザナ」
「国営沖縄記念公園（首里城公園）：龍潭」

琉球王国の城下まち 首里をさんぽ旅

世界級スポット　フォトジェニックスポット　琉球八食スポット

世界遺産 首里城を中心にのんびり歩いて巡りたい観光コース。
琉球王国のお城があったまちとして紡いできた歴史・文化は、
数百年の時を超えて今なお息づく。
首里の風景の中、物語の主人公になるように巡るさんぽ旅。

- - - - - 半日散策コース　——— 1 日散策コース

1

宝口樋川
（たからぐちひーじゃー）

真嘉比川沿いがけの下、石積みで頑丈に作られた共同の湧き水をくみ取る場所。那覇市指定史跡。1807年に作られたとされ、その豊かな水は干ばつにも枯れることがなかったという。市内でも指折りの湧水量を誇る。

Ｐ近隣なし

2

有限会社 玉那覇味噌醤油

創業160余年、天然酵母で無添加の手づくり味噌。四季の移り変わりを経て、ゆっくりと熟成させる天然醸造。コク・香り・旨みの違いを感じることができる。首里の台所に並ぶ伝統の味。

☎098-884-1972
営9:00 ～ 17:30
休土・日曜・祝日
ＰＰあり（普通２～３台）

首里ゾーン「スマホ / オフ」を巡る

3

龍潭
（りゅうたん）

1427年に造られた人工の池。尚巴志（しょうはし・琉球で最初の統一王朝を樹立した国王）が冊封使を接待するために国相の壊機（かいき）に命じ造らせた。亀や珍しい鳥バリケンが多く生息、晴れた日には首里城が水面に美しく映される。
【写真 国営沖縄記念公園（首里城公園）：龍潭】

Ｐ近隣有料駐車場

4

カタチキ 紅型 × ミシン

姉妹運営の紅型工房。沖縄の何気ない色や風習、日常を紅型に取り入れている。紅型の伝統技法や材料をしっかり守りながら、すべて手染めで染色。ストールやバッグなど大切な方へのお土産に。

☎098-911-8604
営営業時間 10:00 ～ 16:00
休日曜・祝　Ｐあり（普通１台）

5

御茶屋御殿石造獅子
（うちゃやうどぅんせきぞうしし）

1677年に造られた王府の別邸「御茶屋御殿」（現・首里カトリック教会）に火避けの獅子として置かれた。御殿では茶道、生花、武芸などの様々な芸能が行われ、国王が遊覧し、冊封使などを歓待したという。がけ崩れの恐れがあったため現在の場所に移動。那覇市指定文化財。

Ｐあり

6

崎山公園・雨乞嶽
（あまごいうたき）

高台にある公園からは那覇の街が見渡せる。御茶屋御殿石造獅子に隣接する雨乞嶽（あまごいたき）近くからの眺めもおすすめ。夜景スポットとしても有名。やや道が狭いため、特に夜は十分注意して訪れよう。

Ｐあり

7

瑞泉酒造株式会社

1887年に創業、琉球泡盛の製造販売元。酒蔵見学が可能。「瑞泉」の名前は創始者喜屋武幸永氏が首里城内のこんこんと湧き出る泉の名称から名付けた。水は龍頭を形取った樋口からでてくるため通称「龍樋」と呼ばれる。首里の地で受け継がれる泡盛を味わおう。

☎098-884-1968
営9:00 ～ 17:20（受付時間9:00 ～ 17:00）
休第2・4土曜、日曜、祝　Ｐあり

8

首里金城町石畳道

首里から港や本島南部へ通じる主要道路として、16世紀に造られた「真珠道（まだまみち）」の一部。当時約10キロにも及んだが、今は金城町に300メートル残るのみ。蔦の生えた石垣や赤瓦の民家など王国時代の面影を残し、周辺では御嶽や井戸（ガー）などの史跡を見ることができる。

Ｐ近隣あり「交通広場」（普通車約10台）

9

首里金城村屋
（しゅりかなぐしくむらやー）

首里金城町石畳道の休憩所、地域住民の憩いの場。ガジュマルの木の下にある沖縄古民家風建築物。無料休息可能（トイレ、座敷有）。CM撮影・婚礼写真など指定管理者に利用許可申請書提出の上可能（1000円/1時間）。地域集会などもあるため節度を持って利用しよう。

開館時間9:00 ～ 18:00
休年中無休（臨時休業あり）
Ｐ近隣あり「交通広場」（普通車約10台）
☎指定管理者 首里金城町自治会
090-1348-2070

10

西（いり）のアザナ

首里城公園敷地には「東のアザナ」と「西のアザナ」がある。「アザナ」とは、遠くを見渡すために設けられた物見台のこと。標高約130メートルの場所に築かれており、那覇市街地を一望、晴れの日は海を越え慶良間諸島まで見渡せる。【写真 国営沖縄記念公園（首里城公園）：西のアザナ】

Ｐ首里城公園駐車場